

コロナ禍に考えること ― 宮沢賢治の宗教性をとおして

湯峯 裕

YUMINE, Hiroshi

キーワード：寄り添うこと 祈り 救い 四次元 宇宙

要 旨

コロナ禍によって人と人とのつながりの必要性、支え合うことの重要性が浮かび上がってきた。そんな時にふと浮かんできたのが宮沢賢治である。熱心な父親を通して幼い時から心にしみこんできた浄土真宗、中学校以降に接することで大きく影響を与えられた日蓮宗、そしてやはり幼いころから聞いてきたであろうキリスト教。そういった宗教的環境のなかで彼は、短歌、童話、詩などといった文学作品を通して、あるいは羅須地人協会等の活動を通して、わが身を捧げて自分の信じるところを書きそして行動してきた。「デクノボー」の「菩薩行」を文字どおり体現した賢治が示してくれたのは、寄り添うことで救うことである。賢治は宗教家ではなかったが、彼の姿勢は宗教そのものであった。そのような宮沢賢治の姿を通してこれからの社会に発信できる何かを考えていく。

1、はじめに

2020年はコロナ禍によって非日常が日常化してしまった年であった。未曾有の災禍に対して協調して対処すべき時に排他的なものが横行した。それには我が身を守る本能的なものもあるが、それを乗り越えて来たのが人間の叡智である。危機を乗り越えるべき時に、緊張感のない軽率な行動や考えは非難されるべきであるが、排除してはいけないのである。排除は監視につながっていく。監視カメラによる管理はすでに一般化しているが、犯罪の防止には歓迎されるものの、日常の行動の監視に利用されると権力に絡め取られる網となる。どこで見られているか分からない緊張感が犯罪の抑制にはなるが、フーコーがパノプティコンで指摘したとおりの権力に絡め取られた状態としての国民の姿がよりはっきりと表された。カメラだけではない。スマホ等の利用履歴の蓄積による行動の集約で緊急事態宣言下での人の動きが把握され、ネットワークの情報によ

ってもからめとられるようになった。『ホモ・デウス』¹でユヴァル・ノア・ハラリが人は全地球いや全宇宙を覆うネットワークのうちのひとつのチップに過ぎなくなっていると警告したその姿が露わになった。

大学も大きく様変わりした。緊急事態宣言下では入構が禁止され、授業はネットワークを通しての遠隔実施になった。特に1年生は学生のお互いの顔も名前も知らず、教員とも画面を通しての交流しかできない。アンケートでは、相互の交流ができないことや将来への展望が開けないことへの不安を訴える声が多かった。普段はそれほど感じていないお互いの交流や支え合いの重さが浮き彫りになってきた。排除でも監視でもないつながりの重要性。当たり前前かがり前のことが当たり前でなくなって、当たり前であまり意識されてこなかったことの重さが浮かび上がってきた。そんな環境の中で困難を乗り越えて新たな学びを見出した学生に共通することは、遠隔の中での教員とのつながりを見つけ出していったことである。「メールやQ&Aのやりとりを通じての質問が対面授業よりやりやすかったため」「毎回の課題に評価とコメントをしてくださるのが嬉しかったです。課題のやる気が出ました。」と、最後の授業でのアンケートに回答を寄せてくれた。そこに見え隠れするのは学生に寄り添う教員の姿である。

筆者も数多くのレポートの点検に追われて苦しみながらも、一人の脱落者も出ずまい（結局は叶わなかったが）と悩み続けてきた。そんな時にふと浮かんできたのが宮沢賢治である。「デクノボー」の「菩薩行」を文字どおり体現した賢治が示してくれたのは、寄り添うことで救うことである。苦しみの中で活路を見出した学生が拠りどころとしたのは、教師を信じて頼ることであった。人は寄りかかるものがあるからこそ生きられる。苦しむ学生たちの姿から余計にそんなことが感じられた。献身的に支えようとする姿であり、生きている間は結局は認められなかった姿の宮沢賢治が改めて迫ってきたのである。寄り添うことで救うことは宗教の根源である。そんな姿の宮沢賢治を見直してみた。

賢治は一度書いた作品に何度も手を入れることが多く、作品の成立時期を特定し難いのであるが、大きく括ると、1909（明治42）年岩手県立盛岡中学校入学以降短歌を書き、1921（大正10）年に家出のようにして東京に行き国柱会の門を叩いた前後から童話等の散文を書き、1922（大正11）年11月の妹とし子の死のあたりから詩を書いている²。それぞれが彼の生き方の節目となっており、彼の作品はしっかりと彼の生きる姿を映し出している。また、1926（大正15）年の「農民芸術概論綱要」と羅須地人協会設立以降は、農業の生産性の向上と人々の生活の安定のための行

動が前面に出てくる。そこで、それらの節目から彼の思想の基盤を探り、最後に彼の生き方を支えてきた諸々の思いを考えていく。

2、思想の基盤の形成

宮沢賢治の持つ世界の大きさは、彼の持つ思考世界の広がりによる。その形成には幼少期からの家庭環境、家を出て中学校に進学してからの人的交流、高等農林学校での学び等が大きく影響している。父親の政次郎は浄土真宗の熱心な信者で、地域の先導的な役割を担っていた。1906（明治39）年には、真宗大谷派の僧侶であり哲学者でもある清沢満之の思想を受け継ぐ^{あけがらすはや}暁鳥敏を招いて仏教講話会を開く。『歎異抄』を中心とした講話や清沢満之についての講話を聞き、その後も何度も暁鳥敏の元を訪ね、暁鳥もその3年後以降何度か花巻を訪れている。のみならず、それほど遠くない地（現在は花巻市）の内村鑑三の高弟斎藤宗次郎とも親しく交流がある広さも併せ持っていた。斎藤は暁鳥の講話会にも参加しているようだ³。

そんな父の元で育った賢治は幼い頃から浄土真宗の教義に親しみ、キリスト教の斎藤とも交流する。暁鳥にも親しく近づき、2度目の来訪の折には盛岡中学校在学のため再会できなかったが、暁鳥による浄土真宗あるいは親鸞の教えからは賢治にとって大きな力を受けている。

盛岡中学校4年生の時、寄宿舎の新舎監排斥運動に関わったために退寮させられ、盛岡市内の寺に下宿をする。そんな時期に浄土真宗の僧侶島地大等に出会う。その後島地の編した『漢和对照妙法蓮華経』を知ることが賢治の人生を大きく変えている。また、斎藤宗次郎と同じく内村鑑三の高弟であった照井真^{まみじ}臣乳は小学校の時の担任であり、中学校時代には盛岡市内のプロテスタント教会のタピング牧師やカトリック教会のプジェ神父の話聞きに行ってもいる。

1915（大正4）年に盛岡高等農林学校に進んでからは指導教授の関豊太郎の指導を受けて、自然科学分野とくに地質学方面の研究に取り組む。幼い頃から「石コ賢さん」と呼ばれるくらい「鉱物や植物や昆虫に熱中⁴」した彼であり、中学校からはしきりに山にも登っていたのであって、彼の研究姿勢は一気に深まっていく。卒業後は、引き続き研究生として残って稗貫郡土性調査等に従事している。また、高等農林入学と同じ年に妹のとし子（戸籍名はトシであるが、賢治は作品中で常に「とし子」としており、以後この表記を使う）は日本女子大学校に入学している。彼女は創設者でありプロテスタントの牧師である成瀬仁蔵の教えを熱心に聞きその影響を受ける⁵。「夏休みには小学生のわたしたちも一しょに、姉から教えられた賛美歌などを合唱したりもした⁶」ようである。

以上見たように、賢治は周りの影響を感受性豊かに柔軟に受け止めてその世界観を深めていった。次に、前述の彼の創作活動の変遷をもとに、盛岡高等農林学校研究科卒業以降の思想についてその変化を追っていく。

3、童話作品

彼の作品は何度も推敲され書き直されるので、第1稿だけで判断できるものではなく、また第1稿の書かれた時期を問題にしてもあまり意味のないこともあるのだが、初めての童話作品「双子の星」と「蜘蛛となめくじと狸」が書かれたのは盛岡高等農林学校を卒業して引き続き研究生として残り稗貫郡土性調査に従事していた1918（大正7）年の夏である。「双子の星」は天空が舞台の美しい話である。天の川の中に置く星の世界の話であることや「水晶のような流れ」

「蠍」「星めぐり」「（追放の）書き付け」など、後の「銀河鉄道の夜」を予告するような表現が出てくる。海底と天空をつなぐ構図も似ている。「銀河鉄道の夜」では、「あれはきっと双子のお星さまのお宮だよ⁷」とある。「星めぐりの歌」も「銀河鉄道の夜」にある⁸。一方で「蜘蛛となめくじと狸」は、最後に「三人とも地獄行きのマラソン競走⁹」とあるように、それぞれがやってきた相手を騙して食べてしまうのだが、最後には自分が死んでしまうある意味不気味な話である。対照的に見えるこの二つが同じ時期に書かれているのである。そう思って2編を見ているとそこに「祈り」があるのが浮かび上がってくる。一つは天空へと昇華する祈りであり、もう一つは地の中で人の命を支える祈りである。とすると「蜘蛛となめくじと狸」は「なめとこ山の熊」を経て「グスコブドリの伝記」へとつながっていく。賢治の童話作品の中で双璧をなし、彼の童話創作の決算ともいえる2編の序章なのである。「蜘蛛となめくじと狸」はそう言い切るには難点もあるが、童話を書き始めた24歳の若さゆえもあるし、何よりもこの作品に流れている仏教的な声のまだぼんやりとした流れの故であろう。

盛岡高等農林学校に入学してから出会った片山正夫『化学読本』も、中学校では盛んに山歩きをしていた彼に大きな影響を与える。島地大等の編した『漢和対照妙法蓮華経』とともに賢治の世界を深めていく。1921（大正10）年、賢治はついに東京行きの汽車に乗り家出して国柱会に向かう。そこでは高知尾智耀が会ってくれたのだが、賢治が考えていたようには受け入れてくれない。でも、それを契機に賢治の童話創作は一気に爆発する。法華経と国柱会との出会いが賢治の創作の原動力となったように言われたりもするが、創作のイメージーションの湧出はそんなに整理されたところからは生まれにくい。賢治の中にこれまで吸い込まれていた子どもの時からの浄土

真宗あるいは親鸞の思い、のちの法華経あるいは日蓮の思い、それに加えて地面から天空までをとらえる科学的な視点。これらのものがこの時の彼の体内には混沌としたものとしてうごめいている。これらの勢いが国柱会というきっかけで一気に吹き上がってきた。その時の彼には、書き留めるのももどかしいくらいに身体中から湧き上がるエネルギーを感じていたはずである。「あやうこそものぐるほしけれ」である。

多くの童話は国柱会の活動が引き金になっていることは間違いない。だから、その思いの基盤には国柱会すなわち法華経の思想がある。だが、「一ヶ月三千枚¹⁰」と言われるように溢れ出るような創作の底にはもっと大きなエネルギーがある。この「三千」はそのままの数字ではない。

「数えきれない」と解釈すべきである。それが賢治の実感である。賢治は法華経にひかれているのであって国柱会のイデオロギーにひかれたのではない。高知尾智耀が丁重に引き取らせたのはその辺りを敏感に感じ取ったからなのかもしれない。多くの研究者が浄土真宗や法華経あるいは国柱会やキリスト教の影響を詳細に研究してそれぞれが綱引きをしているのだが、賢治には意図的ではないにしてもそれらを一つに包み込んだ大きな思いがある。さらに、基盤にあるのが「石コ賢さん」の呼び名のとおり、子どもの頃からの科学的姿勢である。

「なめとこ山の熊」では、「なめとこ山の熊のことならおもしろい。¹¹」との言葉から始まる。この作品は猟師の小十郎を中心にして読み進めていくことが多いのであるが、賢治は「熊のこと」と始めている。実際、作品の冒頭は「なめとこ山」とその近隣の描写から始まり、そこに暮らす熊の状況を映し出している。そして作品は小十郎を見送る熊たちの姿で終わる。その間は猟師の小十郎を中心とする物語になる。山と熊と小十郎、さらには結びの文の「参の星が天のまん中に来て¹²」とあるはるかな天空も含め、この全てを包む世界を賢治は描こうとした。

猟師の殺生を扱った狂言に江戸時代後期の成立の「左近三郎^{さこのさむらう}」がある。猟に出ようとして出会った禅僧を、三郎ははじめは「なぶってやろう」として酒・魚・妻と破戒について力任せに攻撃する。禅僧はそれに不承不承答えるのだが、三郎が猟師であると分かると一転「アアけがらわしや」「まず五戒というて、(中略)なかにも殺生を、一の頭^{いち かしら}に戒めておかれた。¹³」と強く対応するようになる。そこで諏訪明神の神文や禅宗第三祖の僧璨^{そうさん}の『信心銘』を引き合いに出しての禅僧と三郎との問答になる。殺生は破戒であると同時に獣を成仏させる方便であるという諏訪明神の知恵を借用するとともに、善悪という二つは一つにして対立はないという『信心銘』によって殺生戒から救おうとする。狂言に何の解説もなく取り入れられていることから、この二つはす

で広く知られていたのであろう。「左近三郎」が積極的に殺生を包み込んだのに対して、賢治は「祈り」で包み込んでいる。

熊を殺しても小十郎の思いはいつも同じで「熊。おれはてまへを憎くて殺したのでねえんだぞ。おれも商売ならてめへも射たなけあならねえ。」である。いきなり出会った熊に「おまへは何がほしくておれを殺すんだ。」と言われても「お前に今ごろそんなことを云われるともうおれなどは何か栗かしたのみでも食ってみてそれで死ぬならおれも死んでもいゝやうな気がするよ。」としか答えられない。エピソード的に入る町の荒物屋の場面では、「狐けん」では狐に負ける旦那が現実では誰にも負けない不合理を描くが、なめとこ山では小十郎が熊を殺してもその底には「狐けん」の殺して殺される命の共有がある。「間狂言^{あい}¹⁴」のように挿入されたこの荒物屋の場面から後、物語の色合いが変化する。「もう二年ばかり待って呉れ」と言った熊は約束どおりに小十郎の家の前で血を吐いて倒れている。最後には小十郎が熊に殺される。「ちらちらちら青い星のやうな光がそこらいちめんに見えた」小十郎が、「これが死んだしるしだ。死ぬとき見る火だ。熊ども、ゆるせよ。」と死んでいく。その後が感動的な熊たちの山の上での葬送の場面である。小十郎を取り囲む熊たち。「まるで氷の玉のやうな月がそらにかかってゐた。雪は青白く明るく水は燐光をあげた。すばるや参の星が緑や橙にちらちらして呼吸をするやうに見えた。」とある。山から天空まで貫かれた大きな宇宙空間がある。その中で小十郎を囲んだ熊たちは、もはや熊ではなく「黒い大きなもの¹⁵」となって宇宙と一体化している。熊も猟師の小十郎もない。あるのは命と命の響きあいである。「左近三郎」では『信心銘』の「二由一有 一亦莫守 一心不生 万法皆無 無咎無法 不生不心（二は一に由って有り 一も亦た守ること莫れ 一心生ぜざれば 万法皆無し 咎無ければ法無し 生ぜざれば心ならず）¹⁶」を殺生の方便として相手を説き伏せようとするが、賢治は「二由一有」（善と悪というのは二つの相対ではなく一つの絶対のことから成り立っている）に熊と猟師の対立を昇華して静かな一体感を見ている。賢治にはたとえ内面的に一時的な感情の高ぶりはあっても相手との敵対感はない。絶対的な信頼感のある静かな祈りがある。『自然法爾章』にある「行者のはからひにあらず、如来のちかひにてあるがゆゑに法爾といふ。¹⁷」と委ねること、あるいは『歎異抄』の「親鸞にをきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまひらすべしと、よきひとのおほせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり。（第二条）¹⁸」と信じること、これが賢治の作品を通底している。賢治が童話を書き始めるきっかけとして法華経との出会いがあるのだが、根底には子どもの時から親しんできた親鸞がある

と思う。そう考える一つがこの「なめとこ山の熊」であるが、その点については後に述べる。ただし、作品としてはそんな個々の状況を超越した宇宙空間的な広がりがある。

この「なめとこ山の熊」の死ぬことで生きる命が、自分の命を犠牲にすることで人々の命を救う「グスコブドリの伝記」へと連なる。この作品が発表されたのは1932（昭和7）年であるが、初期の頃の「ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記」を改作したものである¹⁹。

4、『心象スケッチ 春と修羅』

1921（大正10）年1月、東京行きの汽車に乗り家出して、国柱会の門を叩き、筆耕などをしながら国柱会の奉仕活動などをする一方で、有り余るほどの勢いで童話その他の散文創作に没頭していた賢治であるが、9月にとし子が病気との知らせで大きなトランクを買って童話の原稿を詰め込んで帰郷する。とし子が花巻高等女学校を退職する一方で、賢治は12月に稗貫郡立稗貫農学校（後に岩手県立花巻農学校）の教諭となる。農業関係や英語の授業を担当し生徒たちとの意欲的な時間を生きるようになる。賢治にとっては安定した時期だったのかもしれないが、それも長くは続かない。翌年から『心象スケッチ 春と修羅』収録の詩の創作が始まる。11月にとし子が結核で死去。その悲しみの一晩に「永訣の朝」「松の針」「無声慟哭」の3編の詩を書き上げる。

はげしいはげしい熱やあへぎのあひだから

おまへはわたくしにたのんだのだ

銀河や太陽 気圏などとよばれたせかいの

そらからおちた雪のさいごのひとわんを……

……ふたきれのみかげせきざいに

みぞれはさびしくたまつてゐる

わたくしはそのうへにあぶなくたち

雪と水とのまつしろな^{にさうけい}二相系をたもち

すきとほるつめたい雫にみちた

このつややかな松のえだから

わたくしのやさしいもうとの

さいごのたべものをもらつていかう

わたしたちがいつしよにそだつてきたあひだ
みなれたちやわんのこの藍のもやうにも
もうけふおまへはわかれてしまふ

(Ora Orade Shitori egumo)

「永訣の朝²⁰」

妹とし子のこの世の命が消えようとする時、「銀河や太陽 気圏などとよばれたせかいの / そらからおちた雪のさいごのひとわん」と無限に大きな宇宙が、ずっと使い慣れた小さなひと腕に集約される。賢治は緑の消えない松の枝から「みかげせきざい」の上に立って雪と水を集める。取り乱した姿ではあるが、菩薩の姿が浮かんでこないこともない。ひとりで旅立って行くのだととし子は見守る皆に平安を残していこうとする。「はげしいはげしい熱やあへぎ」はとし子にも賢治にも共通するものだが全体は静かな絵である。それを詩の末尾の「天上のアイスクリーム」「聖い資糧」が象徴して「すべてのさいはひをかけてねがふ²¹」と閉じる。「天上のアイスクリームになつて」は別の稿（宮沢家所蔵本）では「兜卒の天の食に変わって²²」となっていて全体を救いの世界で締めくくる。一方で「無声慟哭」では、「わたくしが青ぐらい修羅をあるいてゐるとき / おまへはじぶんにさだめられたみちを / ひとりさびしく往かうとするか²³」と感情をそのままに発露する。苦しみ悶えながら平安の救いを見出そうとする賢治の姿である。そこには「兜卒」「修羅」とあるように仏教的な救いを求めている賢治であるが、「天上のアイスクリーム」としたのはキリスト教文化に触れてきたとし子への思いやりがあるのかもしれない。

父親との対立を続けてきた賢治にとってとし子は心の支えであった。自分こそが「順次生に仏になりてたすけさふらふべきなり（第五条）²⁴」であるのに、とし子がひとりで先に行ってしまった。その悔恨ははかり難い。それは翌年夏の青森、樺太方面への旅での哀誦となる。

けれどもとし子の死んだことならば
いまわたくしがそれを夢でないと考へて
あたらしくぎくつとしなければならぬほどの
あんまりひどいげんじつなのだ
感ずることのあまり新鮮にすぎるとき
それをがいねん化することは
きちがひにならないための

生物体の一つの自衛作用だけれども

いつでもまもつてばかりみてはいけない

「青森挽歌²⁵」

時間が経っても「あたらしくぎくつとしなければならないほどの/あんまりひどいげんじつなのだ」というほどの痛手なのである。この苦しみは言語には替えがたい。だから余計に苦しいのである。言語に替えて「がいねん化」できたなら、自分のこの苦しみを外に出して客観化できる。言語で処理すればこの悶え苦しむ渦は整理されるのである。でもそんなものではなく賢治はこの苦しみにまともに向かっていこうとする。それがとし子を救うことになると思じて。賢治の言葉にはどれだけ激していても救いを願う静けさがある。

これらの詩は賢治の生前に出版された唯一の詩集『心象スケッチ 春と修羅』としてまとめられて1924（大正13）年に出版される。これが草野心平の目にとまり、賢治の死後に彼の作品が広く読まれるようになる契機となる。

(mental sketch modified)

心象のはひいろはがねから

あけびのつるはくもにからまり

のぼらのやぶや腐植の湿地

いちめんのいちめんの^{てんごく}詔曲模様

(正午の^{くわんがく}管楽よりもしげく

琥珀のかけらがそそぐとき)

いかりののがさまた青さ

四月の気層のひかりの底を

^{つばき}唾し はぎしりゆききする

おれはひとりの修羅なのだ

(風景は涙にゆすれ)

砕ける雲の^{めじ}眼路をかぎり

れいらうの天の海には

^{せいはり}聖玻璃の風が行き交ひ

ZYPRESSEN 春のいちれつ

くろぐろと^{エーテル}光素を吸ひ

その暗い脚並からは

天山の雪の稜さへひかるのに

(かげらふの波と白い偏光) 「春と修羅²⁶」

とし子が亡くなる前の4月の日付がある。国柱会に入会しようとして家出をして東京にいたものの、妹とし子の病気の知らせで花巻に帰り、稗貫農学校の教諭となる。エスペラント語を学んだりして賢治としては比較的穏やかな時である。この辺りから東京での童話から詩作に重点が移るのであるが、その心情は厳しい。「はひいろはがね」「くもにからまり」「腐植の湿地」と開けるものがない。それを「いちめんの^{てんごく}詔曲模様」として賢治の煩悶を記す。そして「おれはひとりの修羅なのだ」と人間世界の春から疎外された苦悩を表現する。日蓮の「観心本尊抄」には、「しばしば他面を見るに、或る時は喜び、或る時は^{いか}嗔り、或る時は平らかに、或る時は^{むさぼ}貪りを現はし、或る時は^{おろ}癡かさを現はし、或る時は^{てんごく}詔曲なり。嗔るは地獄、^{むさぼ}貧るは餓鬼、^{おろ}癡かなるは畜生、詔曲は^{しゅら}修羅、喜ぶは天、平らかなるは人なり。他面の色法においては、六道共にこれあり。四^{ししゅう}聖は^{みょうぶく}冥伏して現はれずとも、委細にこれを尋ねればこれあるべし。²⁷」とある。地獄界・餓鬼界・畜生界・修羅界・人界・天界の六道に声聞界・縁覚界・菩薩界・仏界の四聖を合わせた十界であるが、人間と畜生の間にあるのが修羅であり、日蓮は「詔曲は修羅」とする。「詔」とはへつらうこと、「曲」とは邪まなこと。

その一方で、「れいろうの天の海」「^{せいはり}聖玻璃の風」と透明感が漂い、「ZYPRESSEN（糸杉のこと：筆者注）春のいちれつ」と天空に伸びる力が感じられる。内にこもった気持ちを一転して力強さが現れる。玻璃（ガラス：筆者注）に「聖」を被せてキリスト教会を思わせたり、糸杉で西洋の景色を見せる。ドイツ語表記を取り入れているところはそんな意図の表れであろう。自分の道を歩いていこうとする賢治の宣言とも取れなくはない。ここにはこれまで吸収してきた親鸞や日蓮やキリスト教や自然科学の全てが含まれている。とし子の死を抱え持ちつつそれを乗り越えていく力となる。

農学校で教鞭をとり生徒との音楽や演劇の活動を続けるかたわら、詩や童話を書き続けつつこれまで書かれたものに何度も手を加えていく。1926（大正15）年3月、教諭であることの安定した身分を捨て自らも農民と同じになって、6月「農民芸術概論綱要」を起稿して（発表されたのは彼の死後）、8月に羅須地人協会を設立して活動拠点とする。

4、「農民芸術概論綱要」

この1926（大正15）年を境に、これまで主に中学校から高等農林学校までの間に詠んだ短歌、主にその後ここまでに書かれた多くの童話、としこの死後多く書かれるようになった詩、それらの思いを蓄えて、それを一気に吐き出すように農村のための活動に勢力を注ぐ。自分の命が残り少ないことを悟ってでもいるように。賢治を世に紹介した草野心平は「概論と「羅須地人協会」の設立は賢治の生涯を二分する分水嶺のやうな役割を持ってゐる²⁸」と指摘する。下根子桜の宮沢家の別荘に手を入れて自炊生活を始め、ここに羅須地人協会を置く。もはや望みなしと自宅に引き取られるまでとし子が療養をしていたところである。賢治の感慨も一人^{ひとしお}であったろう。

「農民芸術概論綱要」の考えをもとに土壌、肥料を含め農業一般の活動を始める。なぜ「芸術」なのか。大逆事件（幸徳事件）が世間を騒がせたのは14歳の時の1910（明治43）年（1911年判決）であり、その年の12月に出版された盛岡中学校の先輩である石川啄木の『一握の砂』は早選手に入れて影響を受けている。羅須地人協会を設立の頃には労農派の勢力が盛岡や花巻にも及んでいるし、農学校の教諭を辞するのともそれと関連があるのかもしれない²⁹。東京に行くたびに当時の時代風潮を敏感に感じ取ってきており、若い彼に影響を与えないはずはない。「芸術」としたのは、官憲からの注目を避けるため、農業は労働ではないという考えのため、あるいは音楽や演劇に熱中した彼の嗜好のため、その他いろいろ考えられるが、やはりこれまでも触れてきたように、様々な人の考えや活動を昇華するより大きな力のもとでの活動を考えたためであろう。あるいはそこに「飢えたる者」にはなりきれない彼の弱点があったのかもしれないが、この鬱々とした気持ちが彼の世界の広さに深みを添えている。

……われらはいっしょにこれから何を論ずるか……

おれたちはみな農民である ずあぶん忙がしく仕事もつらい

もっと明るく生き生きと生活をする道を見付けたい

われらの古い師父たちの中にはさういふ人も応々あった

近代科学の実証と求道者たちの実験とわれらの直観の一致に於て論じたい

世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない

自我の意識は個人から集団社会宇宙と次第に進化する

この方向は古い聖者の踏みまた教へた道ではないか

新たな時代は世界が一の意識になり生物となる方向にある

正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに応じて行くことである

われらは世界のまことの幸福を索ねよう 求道すでに道である 「農民芸術概論綱要 序論³⁰」

「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」はよく知られた一節でありしばしば引用もされるが、解釈に気をつけなければならない。まず、「世界」とは地球の表面の国々ではない。天台宗の一念三千を受け継いで日蓮が「観心本尊抄」で語る「三千大千世界」（三千世界）、すなわち考えられうる限りのあらゆる「世界」であり、空間的だけでなく時間的な広がりもある「世界」のことである。賢治はそれを「第四次元（「農民芸術概論綱要」）」「第四次延長（「春と修羅」）」その他の「四次元」という表現でも示した。次に、「ぜんたい」は世界の「全体」の意味ではない。賢治はこの語を副詞（間投詞とした方がそのニュアンスに近いが文法的には副詞である）のように使うことがある。以下がその例である。

「「どうしてって、来やうとしたから来たんです。ぜんたいあなた方は、どちらからおいでですか。」 / ジョバンニは、すぐ返事しやうと思ひましたけれども、さあ、ぜんたいどこから来たのか、もうどうしても考へつきませんでした。³¹」 「銀河鉄道の夜」

「ぜんたいその形からが実におかしいのでした。³²」 「風の又三郎」

「それからぜんたいこの運動場は何間あるかといふやうに³³」 「風の又三郎」

だから「地球の全体が幸福にならないうち」という意味ではなく、大きな息とともに我が身を投げ出して「三千大千世界」の平安を思い一人ひとりの救済を思っているのである。「銀河鉄道の夜」の「ほんとうのさいわい」であり「グスコブドリの伝記」のブドリの姿である。それを「近代科学の実証」「求道者たちの実験」「古い聖者」とこれまでの賢治が吸収してきた宗教的世界観、科学的世界観の全てにおいて、かつ「集団社会宇宙」「銀河系」とあるように「四次元」の広がりのもとで追求していこうとしたのである。草野が「分水嶺³⁴」といったように、我が身の足をつけるべき場所を見出して「われらは世界のまことの幸福を索ねよう 求道すでに道である」として、農村での活動にすべてを捧げようと宣言したのである。

ここまで見てきたように、彼の思想の根底には宗教の壮大な世界がある。中学校時代から短歌を詠んではいたが、本格的な創作活動に入るきっかけになったのが国柱会であり、彼の表現には

日蓮がある。中学校を卒業したものの、高等学校に進む学友たちと違って卒業後すぐの入院生活。家業を継ぐためと父親は進学を認めてくれない。退院しても父親と衝突が続く。そんな彼を引きつけたのが、法華経の独自のイデオロギーに導かれた行動の強さである。賢治の語りには、これまで指摘してきたような日蓮の語りが見られる。だが、その根底には親鸞がある。物心ついた頃から新鮮な心に吸収してきた語り。暁鳥敏が訪れた時には身近に接している。それ以降もつながりは続いていたようで、『春と修羅』を暁鳥の元に送っている³⁵。青江舜二郎が「古今東西の別なく人間はその所属する民族性や幼児の育ちを、のりこえることはほとんどできず、その点賢治においても、生れながら彼をとりまいていた土俗信仰、さては家庭の他力本願的なしつけが生涯についてまわり、とうとう最後にはそこにもどってしまう。³⁶」と指摘したとおり、感受性豊かな心に染み込んだ思考は終生抜けられないものであり、賢治の思想の根底をなしている。賢治が全てを信じてその救いを思う姿には親鸞がある。そしてキリスト教も彼の思想に染み込んでいる。それは幼い頃からの斎藤宗次郎や照井真^{まみじ}臣乳あるいは中学校の時の盛岡での宣教師の影響も大きい。が、何よりも最愛の妹とし子であろう。とし子は賢治の最大の理解者であり伴走者でもあった。日本女子大学の成瀬仁蔵の元で吸収したキリスト教の教えが、それまでにも地盤ができていた賢治に大きく影響している。社会的な顔としては浄土真宗から日蓮宗に変えた賢治ではあるが、このように彼にはそれらのすべてを包み込んだより大きな宗教的な救いの世界がある。それを最後に「銀河鉄道の夜」で確かめる。

5、「銀河鉄道の夜」

賢治の一連の童話作品の中でも、特に幅広い年齢層で読まれている作品である。「童話」とは一般的には子ども向けの作品という位置付けであるが、賢治の「童話」は、これに限らず、大人でも子どもでも広く読まれる。そんな意味では「童話」とするのは不適切かもしれない。その点草野が「この年齢を無視したやうな振幅は童話の常識からはたしかに外れてあるし小説でもそのやうな状態は想像されない。小説の場合はむしろあり得ないのである。さういふ意味でなら童話となづける事が不自然と言へるかもしれない。³⁷」と指摘したとおりである。中でも「銀河鉄道の夜」は文学作品としての完成度が高い。とし子を亡くして2年後の1924（大正13）年、4月に『心象スケッチ 春と修羅』と12月に童話集『注文の多い料理店』を出版した年に第1次稿が書かれ、第4次稿まで10年近くをかけて書き直されている。第4次稿が書かれたのは1931-32（昭和6-7）年ころである。

よく読まれているのであるが解釈の難しい作品である。舞台は天空を流れる銀河であり、地球を超えた宇宙を描いている。カンパネラやジョバンニなどイタリアを思わせる名前と星祭りなど西洋風の景色から始まる。やがてジョバンニの夢であろうか銀河へと舞台が移る。ダイヤモンド、月長石、金剛石、水晶、^{トパーズ}黄玉など様々な鉱石や鳥の名前その他、賢治の科学的な知識が散りばめられた中に、白い十字架（白鳥座）、ハレルヤ、黒いバイブル、カトリック風の尼さん、賛美歌、十字架（サウザンクロス）、ラッパの声、ひとりの^{こうごう}神々しい白いきもの人と、キリスト教を思わせる様々な表現が出てくる。白鳥座の北の十字架から始まってサウザンクロスの十字架で話は終わる。タイタニック号の沈没によるものと分かる二人の子どもと付き添った青年も登場する。だが、羅須地人協会設立から1933（昭和8）の賢治の死を考えると、この時期の賢治の作品をキリスト教だけで読むことはできない。

作品中に何度か表現を変えながら出てくるのが「ほんとうのしあわせ」である。ジョバンニが追い求めているものである。「みんなのほんとうのさいわい」ともあるように自分の「しあわせ」ではなく「世界がぜんたい幸福に」（「農民芸術概論綱要」）なることを願う気持ちである。それは当時の賢治にとっては「南無妙法蓮華経」からは離れられないはずである。そう考えると、二人の子どもの対話の中の「ぼくたちこゝで天上よりももっといゝところをこさえなけあいけないうって僕の先生が云ったよ。³⁸」の「先生」は「田中智学を暗示している³⁹」との龍門寺文蔵の指摘は否定できない。ただ、終始とし子の面影に静かに寄り添うように書かれている音調からは「南無阿弥陀仏」の方がふさわしい気がするのであるが。一方で、谷口正子が「賢治が、簡単に割り切ってしまったとは思えない⁴⁰」と指摘するように、賢治にはどちらによるかといった二者の選択といった狭いものではなく、「人間の本性から発するものであるからこそ、賢治の文学は、先の二宗教（キリスト教と仏教：筆者注）を信じないものをも感動させるのではないか。⁴¹」という広がりがある。だから、先の表現のすぐ後にある、青年の「ほんたうの神さまはもちろんたった一人です。」に対するジョバンニの「あゝ、そんなんでなしにたったひとりのほんたうのほんたうの神さまです。⁴²」はどれと限定する必要がないしできない。とし子の死を乗り越えて、草野心平の「銅鑼」にも参加し、花巻農学校の教諭の職を捨てて羅須地人協会の活動に没頭していく時期であり、やがて病気に捕らわれ協会の活動もできなくなっていく時期に並行して書き直し書き続けられた作品である。賢治の人生の総決算とでもいう時期の作品であり、「ほんとうのしあわせ」にはそれまでの賢治の全てが込められているのである。そう考えると、「雨ニモマケズ」の詩の次にあった「南無妙法蓮華経」の大きな字は、詩の本体以上に賢治にとって大きな意

味があったように思われる。この詩は彼の死後にトランクの中から弟が見つけた手帳に書かれていたものであり、「銀河鉄道の夜」と重なる 1931（昭和 6）年に病身を押して書き付けたようである。

6、賢治の宗教性

賢治がいかに生くべきかと真っ正面から向き合うきっかけになったのは法華経との出会いであり国柱会との関わりである。だから童話や詩その他の彼の言葉には法華経や日蓮が語られることが多い。自分と向き合い語り合う時に彼の心に浮かび上がるのは法華経や日蓮の言葉であり語りである。だが、これまでに指摘したように、その心の底には親鸞の言葉と語りがある。意識するにせよ無意識にせよ、親鸞の心に動かされている。賢治の作品に流れる祈りと救いへの願いがそれである。日蓮のイデオロギーによる力強さではなく親鸞の信じきる思いであり、強い弱さと言ってよいかもしれない。キリスト教ともその強い弱さで向き合っている。

それはカトリックの遠藤周作がイエスと向き合った姿に通じるのではないだろうか。日本に持ち込まれたイエスではなく日本人の心の底から信じ切れるイエスを問い続けていった。『死海のほとり』（1973 年）では、作品の書かれた時代の物語とイエスの物語が並行して展開していく。何も奇跡を起こせない、何もできずに皆が離れていくイエスの姿が物語の一つ。友人の戸田と私が、学生時代のキリスト教との関わりから 20 年以上後の今の思いを交わしていく物語がもう一つ。イエスを信じることを続け追求することで教会のキリスト教から離れていく戸田と、イエスを信じきれないままにキリスト教を考え続ける私は、対立する二人ではなく作者の煩悶の両面を担っている。最後に大学時代に「ねずみ」と呼ばれた大学のひ弱な宣教師ゴバルスキについて、収容所で飢餓室に送られる時「彼の右側にもう一人の誰かが、彼と同じようによろめき、足を曳きずっているのをこの目で見たのです。その人はコバルスキと同じようにみじめな囚人の服装をして、コバルスキと同じように尿を地面にたれながら歩いていました……⁴³」と、その場面に居合わせた医師からの手紙で語らせている。遠藤のキリスト教についての煩悶とこだわりが現れているように思える。こうして二つの物語は最後に一つになって、何も力はないけれど寄り添うことで救ってくれるイエスを見出すことで、私はイエスを受け入れられるのではないかとの予感を残して終わる。

『侍』（1980 年）は、仙台藩初代藩主・伊達政宗による慶長遣欧使の支倉常長の事跡を基にしたフィクションである。主人公長谷倉は数カ所「六右衛門」と書かれる以外はほぼすべて「侍」

と記される。同行する宣教師ベラスコは西欧キリスト教からの視点で日本人のキリスト教受容を描く。一方、「侍」は役目上はキリスト教受容を取るべきだが、それは残してきた「谷戸」の人たちを裏切ることになると苦しむ。「侍」にとって宗教とは、先祖代々のつながりつまり血縁と土地の人たちとのつながりつまり地縁の上に成り立つものとしてある。ベラスコのキリスト教は個人と神との向き合いつまり一人の心にある。「侍」が最後まで「侍」であることは、キリスト教に向き合う彼の思いを象徴している。数多の困難を乗り越えて帰国した時、既に伊達藩を含む日本は全てキリシタン禁令の下にあり、侍の働きは無益となっている。それどころか、キリシタンとして排除され、明記されていないが命まで抹殺される。死に向けて出立しようとするとき、キリシタンとなった彼の下僕である与蔵は「ここからは……あの方がお供なされます⁴⁴」と声を掛ける。藩のために命がけで海を渡り長い年月の後に帰ってきても報いられるどころか抹殺される「侍」の運命。その自分の運命を受け入れた時、「侍」はイエスと一つになる。

この二つで『沈黙』（1966年）では書ききれなかった遠藤にとってのイエス、弱いけれど強いイエスの姿を描いている。賢治も同じであるが、遠藤はそうやってイエスと向き合ったのに対して、賢治はイエスも日蓮も親鸞もすべてを昇華した仏になろうとした。それが手帳の「雨ニモマケズ」の最後に書かれた「南無妙法蓮華経」になったのではないか。河合隼雄は鎌倉新仏教と鎌倉時代初期の華嚴宗の僧明恵を並べて「イデオロギー」と「コスモロジー」として対比し、親鸞も「イデオロギー」に入れているように読めるのだが⁴⁵、「愚禿」を貫いた親鸞も「コスモロジー」を求めていたと思われるし、賢治はまさにそれである。賢治の内面には親鸞と同じく強いエネルギーがうごめいており、賢治はそれを「修羅」とした。だが、彼の作品にはエネルギーを包み込む優しさがあり、強さを包み込む祈りがあり、それが弱さとして現れてくることも多い。そんな思いが、童話の場合「双子の星」や「蜘蛛となめくじと狸」から「なめとこ山の熊」「グスコブドリの伝記」「銀河鉄道の夜」へと流れ続けている。それが賢治の「コスモロジー」である。

7、まとめ

コロナ禍によって人と人とのつながりの必要性、支え合うことの重要性が浮かび上がってきた。これまで科学の進歩によってその技術の恩恵を存分に受けてきて、人は功利的な受益を追い求めてきたのだが、コロナ禍によって世界中の人の動きも物の動きも止まってしまい、物やサービスの恩恵に大きな制約が出てきた。それ以上に深刻だったのが、社会的な生活から疎外される

ことにより孤立感や孤独感にとらえられてしまっていて、自分の存在の証を見失ってしまったことである。大学に入学したばかりの大学1年生は特にその感が強かったようだ。社会的な状況が全く違うのではあるが、宮沢賢治も自分の存在を問い続けていた。そんな賢治を映し出す鏡は、生徒・学生としての学校であり、対立する父親であり、寄り添ってくれる妹であり、そして、短歌や童話や詩などといった創作であり、土地や農業の学びであった。その渦中で煩悶があり苦悩があったのだが、自分を表出する時には静けさがあった。そんな賢治について本稿では宗教的な側面から考えてきた。賢治は宗教家ではなかったが、彼の姿勢は宗教そのものであった。人に寄り添い支えること。山根道公が河合隼雄の言葉を引いて「現代人は生活の次元の豊かさのみを追い求め、その点で有効な「科学の知」によって日本人は「生活の勝利者」になったが、死を超えて自分を最後に受け入れてくれる「神話の知」を持たなくなった日本人は自分と自分を越えた世界との関係性を失って孤独になり生きることに疲れた「人生の敗北者」になったということになる。46」と指摘しているが、コロナ禍のなかで浮かび上がってきた人として生きることのそのような難しさの克服について、賢治の宗教的な思いを文学作品を通して考察しようとした。こんな時代だからこそ追い求めるべき生き方を、宮沢賢治の生き方をおして社会に発信していくことが今後の課題である。

後 注

¹ ユヴァル・ノア・ハラリ『ホモ・デウス 上・下』、河出書房新社、2018年。

² 草野心平『近代作家研究叢書9 宮沢賢治覚書』、日本図書センター、1983年、p. 46。

³ 栗原敦『宮沢賢治—透明な軌道の上から』、新宿書房、1992年、pp. 9-49。

⁴ 宮沢清六『兄のトランク』、筑摩書房、1991年、p. 243。

⁵ 山根知子「宮沢賢治の〈信仰と教育〉および「大宗教」に関する思想—宮澤トシが学んだ成瀬仁蔵の思想から」、『キリスト教文学研究 34』、日本キリスト教文学会、2017年。

⁶ 宮沢清六、P. 248。

⁷ 『【新】校本宮沢賢治全集』第11巻、筑摩書房、1996年、p. 162。

⁸ 同上 P. 159

⁹ 『【新】校本宮沢賢治全集』第8巻、筑摩書房、1995年、p. 18。

¹⁰ 宮沢清六、p. 253。

¹¹ 『【新】校本宮沢賢治全集』第10巻、筑摩書房、1995年、p. 264。

¹² 同上、p. 272。

¹³ 『日本古典文学大系 43 狂言集下』、岩波書店、1961年、pp. 264-268。

¹⁴ 青江舜二郎『宮沢賢治 修羅に生きる』、講談社、1974年、p. 83。

¹⁵ 『【新】校本宮沢賢治全集 第10巻』、pp. 264-272。（「なめとこ山の熊」の全てはここから）

¹⁶ 梶谷宗他『禅の語録 16 信心銘・証道歌・十牛図・坐禅儀』、筑摩書房、1974年、p. 12。

¹⁷ 本願寺出版発行 浄土真宗聖典注釈版 p. 768、<http://www.asahi-net.or.jp/~YI9H-URYU/qa/s-zinenhouni.htm>

-
- 18 金子大栄校注『歎異抄』、岩波書店、1981年、pp. 42f。
19 『【新】校本宮澤賢治全集』第11巻、凡例xii。
20 『【新】校本宮澤賢治全集』第2巻、筑摩書房、1995年、pp. 138-140。（「永訣の朝」の引用は全てここから）
21 同上。
22 同上、p. 140。
23 同上、p. 143。
24 金子大栄校注『歎異抄』、岩波書店、1981年、p. 48。
25 『【新】校本宮澤賢治全集』第2巻、pp. 375f。
26 同上 P. 22～P. 23
27 戸頃重基校注『日本思想体系 14 日蓮』、岩波書店、1970年、p. 137。
28 草野心平『近代作家研究叢書 9 宮澤賢治覚書』、日本図書センター、1983年、p. 89。
29 青江舜二郎、pp. 151-168。
30 『【新】校本宮澤賢治全集』、第13巻、筑摩書房、1997年、p. 9。
31 『【新】校本宮澤賢治全集』第11巻、p. 148。
32 同上、p. 174。
33 同上、p. 181。
34 草野心平、p. 89。
35 栗原敦、p. 47。
36 青江舜二郎、p. 64。
37 草野心平、p. 33。
38 『【新】校本宮澤賢治全集、第11巻、p. 165。
39 龍門寺文蔵『「雨ニモマケズ」の根本思想 宮澤賢治の法華経日蓮主義』、大蔵出版、1997年、p. 98。
40 谷口正子『仏教とキリスト教の中の「人間」—『歎異抄』、宮澤賢治、石牟礼道子ほか』、国文社、2007年、p. 118。
41 同上、p. 108。
42 『【新】校本宮澤賢治全集、第11巻、p. 165。
43 遠藤周作『死海のほとり』、新潮社、2010年、p. 410。
44 遠藤周作『侍』、新潮社、1986年、p. 405。
45 河合隼雄『明恵 夢を生きる』、京都松柏社、1987年、p. 78。
46 山根道公「遠藤周作と宮澤賢治 死をめぐる宗教性」、『キリスト教文藝 29』、日本キリスト教文学会関西支部、2013年、p. 10。

参考文献

- 青江舜二郎 『宮澤賢治 修羅に生きる』 講談社 1974年
別役実 『イーハトーボゆき軽便鉄道』 白水社 2003年
遠藤周作 『侍』 新潮社 1986年
遠藤周作 『死海のほとり』 新潮社 2010年
原田香織 「狂言『左近三郎』における禪問答と戒律」『国際禅研究 1』 東洋大学東洋学研究所国際禅研究プロジェクト 2018年
梶谷宗忍他 『禅の語録 16 信心銘・証道歌・十牛図・坐禅儀』 筑摩書房 1974年
金子大栄校注 『歎異抄』 岩波書店 1981年
河合隼雄 『明恵 夢を生きる』 京都松柏社 1987年

-
- 小山弘志校注 『日本古典文学大系 43 狂言集下』 岩波書店 1961年
- 栗原敦 『宮沢賢治—透明な軌道の上から』 新宿書房 1992年
- 草野心平 『近代作家研究叢書 9 宮沢賢治覚書』 日本図書センター 1983年
- 丸山義昭 「『なめとこ山の熊』を教室でどう読むか」 『日本文学 69(3)』 日本文学協会 2020年
- 見田宗介 『宮沢賢治 存在の祭りの中へ』 岩波書店 2001年
- 宮沢賢治 『【新】校本宮澤賢治全集』 全16巻及び別巻 筑摩書房 1998年～2009年
- 宮沢清六 『兄のトランク』 筑摩書房 1991年
- 望月善次 「宮沢賢治における宗教的考察の困難性」 『日本文学 69(3)』 日本文学協会 2020年
- 沼田健哉 「宮沢賢治の宗教体験と文学」 『桃山学院大学キリスト教論集 No. 33』 1997年
- 岡谷昭雄 「宮澤賢治論—身体的語彙から見る賢治の宇宙—」 『教育学部論集(9)』 佛教大学教育学部 1998年
- 小野寺功 『評論 賢治・幾多郎・大拙—大地の文学』 春風社 2001年
- Pullattu Abraham GEORGE 「賢治作品にみられるキリスト教的モチーフ—十字架とマリア像について」 『日本語・日本学研究第2号』 2012年
- 龍門寺文蔵 『「雨ニモマケズ」の根本思想 宮沢賢治の法華経日蓮主義』 大蔵出版 1997年
- 島菌進 「死と向き合うということ：宮沢賢治の悲しみと恵み」 『キリスト教文化研究所紀要』 上智大学 2014年
- 谷口正子 『仏教とキリスト教の中の「人間」—『歎異抄』、宮澤賢治、石牟礼道子ほか』 国文社 2007年
- 戸頃重基校注 『日本思想体系 14 日蓮』 岩波書店 1970年
- 富山英俊 「宮沢賢治とキリスト教の一面（反語の教師イエス）と仏教の一面（本覚思想）上・下」 『宮沢賢治研究』 宮沢賢治研究会 2015年
- 富山英俊 「宮沢賢治とキリスト教の諸相—補論」 『言語文化 34』 明治学院大学 2017年
- 八重樫昊編集 『宮沢賢治と法華経』 普通社 1960年
- 山根道公 「遠藤周作と宮沢賢治 死をめぐる宗教性」 『キリスト教文藝 29』 日本キリスト教文学会関西支部 2013年
- 山根知子 「宮澤賢治の〈信仰と教育〉および「大宗教」に関する思想—宮澤トシが学んだ成瀬仁蔵の思想から」 『キリスト教文学研究 34』 日本キリスト教文学会 2017年